

Title	宋元刊両唐書および五代史記について
Sub Title	
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1984
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.21 (1984.) ,p.121- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	太田次男教授退職記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000021-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宋元刊兩唐書および五代史記について

尾崎 康

本稿は前輯所載の「宋元刊南北史・七史および隋書」に続くものであるが、新唐書の宋刊本およびその覆刻本については、すでに第一輯（一九七四年）に発表してある。当然ここではそれを除くが、標題は煩瑣を避けて右のようにしておいた。

旧唐書

三国志・晋書の項で触れたが（宋元刊三国志および晋書について、宋会要輯稿・麟台故事によれば、旧唐書の校正是この二史とともに咸平三年一〇月に始められ、同五年（一〇〇二）に国子監に送られて板に鏤られた。新唐書が欧陽脩によって編纂、上進さ

れたのは、降って嘉祐五年（一〇六〇）七月である。

南宋初期刊本

旧唐書の宋元版は唯一、この南宋初期刊本が現存するにすぎない。次で明版としても、嘉靖間人詮刊本だけで、したがって百衲本も南宋刊本を底本とし、過半の欠卷に聞人詮刊本をもつて補う。両本は覆刻の關係にあるとかねていわれてきたが、全体に似た感じではあるものの、そうではない。

北京図書館現蔵の残本六九卷三二冊であるが、瞿氏鉄琴銅劔樓の旧蔵本である。百衲本におそらくその全卷が影印されたほか、鉄琴銅劔樓宋本書影に卷四五（志二五）第四・一七葉、中

国版刻図録の図七三に卷六八（列伝一八）首半葉の書影が掲載されている。以下、これらとその解説、および鉄琴銅劔樓藏書目録、北京図書館善本書目によって記述する。なお、この末巻と同じ列伝卷一四〇下の一四四上の五巻が、張金吾の愛日精廬藏書志にも著録されている。

存六九卷
 卷三一 一三四・四一 四五・四八 一五〇・
 六五 一七八・八八 一八九・一〇〇 一一一・
 一二八 一三三・一六五 一六九・一七九
 一八四・一九〇 下 一九四上

〔宋紹興〕兩浙東路茶塩司刊 三三冊 北京図書館藏
 通算すればたしかに六九巻であるが、鉄琴銅劔樓藏書目録および同宋元本書目（江刻書目三種所収）は同じ存巻次で「凡六十一巻」とし、中国版刻図録にも六一巻とある。一方、百衲本跋および校史隨筆は巻次を同じように示して六七卷子巻二巻（余）といい、校点本の出版説明は六七巻とする。卷一九〇と一九四がそれぞれ上下を欠くのは標記に明らかであるが、百衲本をみても他にとくに欠葉の多いような巻はない。

卷三一首に見ると、首題は「唐書志卷第十一／（低二格）劉（隔四格）昉（隔三格）等修」とあって、列伝も同様であるが、大題を記

さない。左右双辺、版刻図録によれば匡高二・四×広一四・二。一四行、行三五～六字、注文小字双行三〇～三二字。版心は白口、上方に。印があり、単魚尾で、その上に「（第）十四」のように冊次を記し、すぐ下に「唐志（伝）十一」のように題を、さらに下方に丁付と刻工名を雕る。大小字数はなく、刻工名を欠く場合もあるが、補刻はないらしいから、他にほとんど変化はない。刻工名は、百衲本によれば、

2 丁珪	3 弓成	4 方成	方彦成	王介	王升	王正
王田	王因	王圭	王安	王成	王伸	王昌
王茂	王康	王惠	王華	王榮	6 朱因	朱明
江文	江通	7 余全	吳圭	吳邵	吳紳	李昇
汪文	阮于	阮宗	8 周尚	周浩	林俊	林英
林達	林達	9 姚臻	施章	施蘊	胡滂	洪茂
10 徐子明	徐侃	徐宗	徐忠	徐杲	徐高	徐顔
時明	馬俊	11 婁謹	張元	張永	張良	張敏
張達	張謹	章楷	許文	許成之	許春	許椿
郭良	陳文	陳安	陳迎	陳英	陳浩	陳達
陳錫	陳濟	陳礼	12 傅中	黄安	黄季常	黄彬
黄華	黄暉	13 楊武	葉旦	葉邦	葛珎	14 趙宗

趙実 15 劉益 劉閏 蔡道 鄭英 16 駱昇 駱宝

18 藍昂 21 顧昌 顧祐

避諱欠筆は、玄弦眩絃懸 朗眺 斑挺 敬傲驚 弘泓 殷澱
匡竟境鏡 胤炅 恒恒 楨貞 漬微懲 署樹豎 讓 頊頊 勗 估 恒洹
垣完桂 構確購 遘勾 確穀 の各字に行われている。

多くの巻の巻末に、それぞれ左のような校正校勘の官銜各一行がある。

右文林郎充両浙東路提舉茶塩司幹辦公事霍文昭校勘

卷 31 32 33 34
100 101 108 109 128

左從政郎紹興府錄事參軍張嘉賓校勘

卷 41 42 44 45 48 50

左奉議郎充紹興府府學教授朱倬校正

卷 43 165 166 168 169 179 180 181 182 184 190 下 191 192 193

右文林郎充両浙東路提舉茶塩司幹辦公事蘇之勤校勘

卷 65 66 68 69 70 71 72 73 74 75 77 78 88 89 90 91 93 95 96 97 103 105 106

右文林郎充浙東路提舉茶塩司幹辦公事蘇之勤校正

卷 92

左從政郎紹興府錄事參軍徐俊卿校勘

卷 107 129 130 131 132 133

「紹興府鎮／越堂官書」のおそらく縦一五_{チセン}余の大型印が、
卷四一・四三・七三・八八・一七九・一九〇下の首にみえる。

これについては瞿氏の両目に、「鎮越堂在紹興府署蓬萊閣之下、

嘉定辛巳建、当是宋時鈴記也」との考証がある。

卷六五（伝一五）第一葉、一〇四（五四）第二・二葉、一一

〇（六〇）第八葉、一六五（一一五）第一葉裏、三葉、一九四
上（一四四上）第一七葉に、百衲本では明刊本が入っているが、
原本は欠葉かと思われる。

版心上方に冊次が雕られてであると述べたが、この残本は第一
四・一五・一八・二一・二五・二八・三一・三六・四〇・四一・
五〇・五一・五四・五五・五七・五八冊にあたる。計二四冊で
ある。ただし、丁付は一冊のうちでも巻ごとについているから、
数巻を収める一冊がすべて首尾完好であるかはわからず、それ
が確実なのは、第一九冊（卷四二・四四）_{計七四葉}、二六冊（卷六七・七〇）_{計四四葉}、二
七冊（卷七一・七四）_{計四八冊}、三三冊三五冊（卷二〇三・一〇六）_{計四四葉}の五冊にすぎ
ない。一冊の葉数にやや幅があるが、巻末の六巻余の欠巻のと
ころは、百衲本および校点本によって計算すると一二〇葉弱程
度となり、二巻にあたるかと推定されるから、この本は本来、
六〇冊に装訂されたかと思われる。

刻工は南宋初期の紹興年間の諸刊本のもの共通するものが
多く、とくに外台秘要方四〇卷（静嘉堂文庫・宮内庁書陵部・
北京図書館蔵）とは、役人の名は違うものの同じ両浙東路提舉

茶塩司幹辦公事の官銜をもち、かつ同じ紹興中の刊本と推定されるだけに、それが実に二八人にも及ぶ。そのほか、至紹興二年刊の思溪版大藏經と五人以上、同七年ごろ刊の新唐書（静嘉堂文庫・足利学校遺蹟図書館等蔵）と四人、同九年刊の毛詩正義（杏雨書屋蔵）と九人、同年刊の文粹（北京図書館蔵）と五人以上、同一六年間の事類賦（北京図書館蔵）と六人以上も合致し、これらはいずれも杭州とその周辺で刊刻されたものである。ここで以上というのは、中国版刻図録に列挙された刻工との対比による場合、および大藏經は調査が全蔵にははるかに及んでいない場合で、それはおそらくその本の一部であろうからである。また、文選（五臣并李善注）（足利学校遺蹟図書館蔵）は紹興二八年の補刻（宮内庁書陵部蔵本）のまだ入らない本であるが、これと一三人、紹興末から次の代にかけての両淮江東転運司刊三史やいわゆる眉山七史とも、各六、七人が合う。これを表示したのが下表で、版刻図録が「皆南宋初期浙中習見之良工」というこれら刻工から、南宋紹興中（一一三二—一二二六）の刊本と断定するのになんら躊躇するところはない。

書名	刊年	刊地	同名刻工
思溪円覚藏經	紹興二年	湖州	王成 徐杲 徐高 徐顔 趙宗
(新) 唐書	七	湖州	王介 王成 王昌 江通 吳邵
毛詩正義	九	紹興府	阮于 徐杲 徐高 張謹 章楷
文粹	九	臨安府	陳迎 陳錫 駱昇 駱宝
事類賦	一六	兩浙東路	王因 王成 吳邵 阮于 徐杲 丁珪 阮于 徐杲 徐高 洪茂 陳錫
文選	二六 以前	明州	方成 王因 王伸 江通 吳圭 阮宗 洪茂 徐宗 施章 張謹 陳迎 黃暉 葛珎 駱昇
外台秘要方	紹興	兩浙東路	丁珪 弓成 王介 王安 王成
			方彥成 朱明 江通 余全 吳邵 李昇 阮于 林俊
			施蘊 徐侃 徐杲 徐高 徐顔 時明 婁謹 張永
			章楷 陳文 陳浩 葉邦 趙宗 鄭英 黃季常
轉運司 三史	南宋前期	兩淮江東	王榮 林俊 洪茂 徐侃 徐杲 徐顔 婁謹
(所謂眉山) 七史	南宋前期	江浙	王升 王圭 王華 朱明 李昇 徐杲

校勘官も紹興の人で、朱倬については、すでに明嘉靖一八年三月の聞人詮刊本の文徵明の叙に、

後有教授朱倬名、倬忤秦檜、出為越州教授、当是紹興初年。とあり、宋史卷三七二などの伝で、宣和六年の進士であることとともに、右のことが明らかである。張嘉賓は、淳熙三山志卷二八によれば、建炎二年の進士である。紹興府録事参軍の任には、三二年ある紹興年間の前半には昇つていよう。他の三人については未明である。

欠筆も高宗の諱に終っている。

以上によって、紹興中に両浙東路茶塩司において刊刻されたことに疑いの余地がなく、従来の書目書誌に書かれてきた通りである。

そして、行格・刀法からも、この期の官刻本の多くと同様、これも北宋刊本の覆刻本かと思われる。

本文については、旧唐書はこの南宋初刊本のあと宋元代には刊刻された形跡がなく、四〇〇年を経て明嘉靖一八年の余姚の聞人詮の刊本が出るに至るから、この両本について鉄琴銅劒樓善本書目が対校し、百衲本および校史隨筆がそのうちの典型的なものを採って例示する。

校史隨筆は、「聞人詮刻本」の条に次で、「宋刻明刻之異同」

と題して、両本の曆志、地理志、李白伝の三条を対比する。これによると、卷三四曆志三の「求九服所在每氣触差」から、懼・聞の両本の本文にはほとんど相違がないし、殿版以下も同様である。すなわち、これら三条については宋本を採ったのであつて、とくに曆志の記事は新唐書（卷二八曆志四下）の記事も参照して、注にそれを証している。懼盈齋はすぐ続いて旧唐書校勘記六六卷・逸文一二卷を刊行したが、これに右の三条も指摘があり、太平寰宇記、冊府元龜を引いて校している。校点本はこれを利用して、宋刊本を是と判断したものであるが、一節は、六〇字ほどのなかに明刊本に大きな文脈の混乱があり、卷四一地理志四の広州中都督府の条、卷一九〇下文苑李白伝には、明刊本にかなりの脱落がある。

これらの記事について、校点本は宋本とほぼ同文である。

校点本は、清道光中甘泉岑氏懼盈齋刊本を底本とし、これら宋・明刊本、武英殿版および浙江書局本・薛古堂刊本を参校しているのであるが、懼盈齋本は聞人詮本の重刻であるこのような場合は当然この三条にとどまらず、全卷のかなりに及んでいよう。

旧唐書の古刊本は、前述のように宋・明版がわずか一本つつ現存するにすぎず、原刊の北宋本を除いて、宋代に他にまったく刊刻されたことがなかったとは断言できないが、その可能性はきわめて薄いと思われる。元大徳九路儒学刊十七史は、実は十史にとどまったらしく、南北朝七史を含まないが、旧唐書はむろん十七史に入らない。明の聞人詮刊本の文徵明の序に「是書嘗刻於越州、巻後教授朱倬名、……」とあり、懼盈齋の校勘記の目録の末の岑建功の序に「錢氏敏求記有至樂樓鈔本、葉石君所借鈔者、所謂影宋本也、末巻亦有朱倬名、……」とあるのも、すべてこの南宋本ないしはその写本であることが明らかである。しかも、この南宋初期刊本は、北宋咸平原刊本の覆刻とみられるだけに、旧唐書にはこれに勝るテキストはありえない。

(附) 明嘉靖一八年年余姚聞人詮刊本

旧唐書にはあまりに版本が少いために、明清にはほとんど唯一の存在で聞人詮刊本が重用されたから、これについて附言しておく。

上述のように北宋で一一世紀初頭にはじめて刊刻され、一世

紀後の南宋初におそらく覆刻されたほかに、宋代を通じてあらたに雕版されたことはなかったであろう。南宋紹興年間から四〇〇年を経て、明嘉靖一八年年余姚の聞人詮が苦心の末にこれを刊行したのであるが、その経緯についてはその聞人詮・楊循吉・文徵明の三序に明らかである。

聞序によれば、そのテキストの探訪に努めてようやく列伝を光祿張氏から、紀志を守漢公から得たが、それは「宋時の模板」であつたという。文序が南宋本に触れていたから、これもそれを指すものと思えないが、序の次には「惠借藏書」として、陳沂・王延喆・王穀祥・張汴の四名を挙げている。王氏は嘉靖六年に南宋黄善夫本史記を覆刻しているが、原本を所有していたのでなく、一時的に借用して模刻したことは池北偶談に明らかである。

さて、三序とは聞人詮の刻旧唐書叙二葉、楊循吉の旧唐書重鏤紀勛序二葉、文徵明の重刻唐書序四葉であり、続いて「桐空空鄙夫繆承校史之役寔維／……」の一葉があつて、ここに惠借藏書をはじめ、捐俸助善、分番校対、出資経費の諸氏の名が列ねられている。唐書目録が三五葉にも及んだあと、巻一首題は南宋刊本には欠巻であるが、百衲本に見られるよう

に、ここには撰者・刻者・校者名を含めて六行をもっている。左右双辺(二一・四×一四・三^三)。一四行二六字で、行格は南宋本と同じようであるが、また字様もかなり似せているが、巻頭に校者名を入れることで行の送りが相違して、覆刻とはとてもいえないし、本文に異同が多ければなおさらである。版心も南宋本に似せてあるが、百衲本がその上方に。印を毎葉に付けているのはそれを誇張する作為で、原本にはない。

それはともかく、嘉靖以後殿版の出現までこれはほとんど唯一の版本であつたので、補刻を重ねつつ重用されたい。したがって現存本の数も多く、わが国内にも二〇部は存在するようであるが、それだけに補刻を重ねていて、原刻本のほかに三次までの通修本を私は確認している。

新唐書

新唐書については、先に宋刊本をとりあげ、その一の北宋嘉祐刊本として伝えられてきた本が、実は南宋紹興七年ごろの、おそらくはその覆刻本であることなどを証した(宋刊新唐書について本論集一一七四)。この稿は誤字誤植が多く、不注意きわまりなくお恥し

いかぎりであつたが、さらに重大な過失を犯している。

それはいまにして思えば、百衲本が底本のいわゆる嘉祐刊本の欠葉など三四葉もを、一連の独特の字様をもって精妙に補写したらしいものを、おそらく実在しないであろう「南宋中期建安」刊「一四行本」として信じこまされたらしいのである(四〇七頁)。百衲本の目録上第五、一六葉、同下一、一八葉、卷二一第六葉、卷五六第六葉、卷八九第七葉、卷一二一第六葉であつて、字様は史記黃善夫本・新唐書魏仲立本などと同じ、やや肉太で右上りという南宋中期建刊本の典型であり、それらが一〇行一九字という大字本であるのに、一四行二五字内外という珍しいものである。しかも避諱欠筆がかなり嚴格に行われて、南宋中期にふさわしく光宗の敦・熾、寧宗の廓字に及んでいる。あまりに鮮やかな作為であつて、百衲本にはその封面にも巻末の張跋にも、静嘉堂本・北京図書館本・嘉業堂本を用いたとしか書いていないから、私は当時の北京図書館にこのような一本が存在したものと信じ、特に一項を設けて記述したのであつた。この一連の正史宋元版の調査研究を進めてゆくうち、百衲本には底本を曖昧にしたり、改変したりする場合の多いことを痛感した。清朝以前の當利に走る書肆の所業にあらず、張氏の業

績があまりに大きいだけに、何のための百衲本であったのかと疑問を抱かざるをえない。

それはともかく、ここでは元大徳本を扱う。

元大徳一二年建康路儒学刊本

元大徳路儒学本の唐書については、夙に神田喜一郎氏が建康路儒学の担当であることを指摘された。大徳丁未（一一）の（建康路儒学学録）戚明瑞の刊序があり、昇（唐代の昇州で元代の建康路）がこれを鋳したことが明記され、さらにすぐ続けて「建康路明道書院監造」との一行の次に、建康路儒学および同溧水州・溧陽州儒学等の関係者一一名の列銜があるからである。元刊唐書は、晋書とともに明の嘉靖一〇年前後に、南京国子監二十一史の一とされ、補刻を重ねつつ清代まで四〇〇年間も用いられたから、その伝本は比較的多いのであるが、二十一史に編入される前の、つまり嘉靖初年以前の印本は、後表のようにきわめて少ない。この刊序や官銜は、善本書室蔵書志・適園蔵書志・伝書堂善本書志・五十万卷樓蔵書目録等に移録されているというものの、全文ではなく、また実はそのわずかな善本のうちのただ一本に現存するにすぎないものである。

いささか長文であるが、他に全文を著録するものも稀なので、左にこれを掲げる。別に題を掲げないが、版心には「唐序」とし、毎半葉九行で、三葉に及ぶ。

李唐英主送興夷類鉅荒□武功退
乱略粲乎有文以致天下之隆平嗣
有丕緒者遏佚前人允扶衰救危墨釘
墨釘竹固已濫于金匱石室間矣宋
墨佑中欧陽公被旨□輯唐書紀用
其墨法其志礼樂則謂古者礼樂出
不一没世率為空名五行志中破諸
儒災異附会之說伝則宋尚書刪述
皆目一書出兩手申命欧公併刪外
伝公曰宋前脩也人所見多殊豈能
患如已意於是一無所易書成例合
官高者書其名公曰予豈可掩宋之
功以為己力於是紀志書欧而宋之
氏公書於伝宋嘗曰自古文人不相
讓此事所未聞至令宋史題之大徳

丙午拜都侍御持節江東而嘗欲部

下各路分刊十七史昇所錄者唐書

墨釘 邪建康路推官呂承務提其綱

前甘州路教授趙伯升日涖四學監

造者且敦儒尋友縷緝毫聯白一校

至三校用心亦勩矣嘗僕鼓篋昇序

一日命述其事辭不已而曰唐□一

十八君本於太宗聽仁義之一言以

故制度紀綱幾三百載使昭宣亦□

以理而維其法則豈止昭宣而已後

之觀史者苟知徒法不能以自行雖

若稽墳典亦可得其綱領若舍理目

求法不維不知古亦不知唐大德丁

未元正十一日五雲山威明瑞書

建康路明道書院監造

建康路溧水州儒學監造本學教諭朱祐之李君夷

建康路溧陽州儒學監造本學教諭趙奇孫

建康路儒學監造前祈門縣儒學教諭陳宜甫

建康路儒學直學 馬琪 沈振租

建康路儒學監造前□州學教授學正侯起萃

建康路明道書院 山長 張坦

建康路儒學學錄 威明瑞

建康路儒學學正 劉子壽

建康路溧水州儒學教授 屠約

建康路溧陽州儒學教授 仇遠

建康路儒學教授 趙由璋

この序および官銜のあるのは、中央図書館（北平）蔵本のうちの存一二五卷四九冊本の巻頭である。この本は首一四卷を欠くが、嘉祐五年曾公亮の進新唐書表、大德九年の雲謙の跋のほかに、目録をも備えるから、首目一卷は残存したことになる。

ただ、この本には明らかに元末明初の補刻が行われており、所掲のように墨釘の箇所があり、第二葉は中央部、ほぼ第八・九字の中間に左右に割れめが走り、官銜のうち□としたところは読めない。後にいう王国維が、ここを「□陵」とするようには見えず、ほんのごくわずかに残る下方が無理すれば「陵」のようでないこともないが、少くともここに二字分あるとは思えないものの、伝書堂善本書志本の方が早印で破損が進んでいない可能性もあり、参考にはしておく。

さてその伝書堂善本書志著録本は卷二一七・二一八の二巻をわずかに欠くだけらしく、戚明瑞序の本文は載せないが、官銜はすべて列挙する。明代の補刻はないとし、田耕堂蔵の一印があるという。しかし、この欠二巻本は涵芬樓燼余書録に見えず、北京図書館善本書録にも著録されていない。

善本書室蔵書志と五十万卷樓蔵書目録本は、戚明瑞序のほぼ中間の第一五行末からほぼ七行を抜萃して載せ、神田氏もこれを引用されたものらしく、逆に校勘官については二人のうちの「溧水学教授屠約、溧陽学校教授仇遠、乃杭人也。約字存博号月汀、官至徽州教授。遠字仁近号仁、父官至杭州知事、著有金淵集・山邨集」と二人にだけ触れている。

さてこの新唐書は、原刻本が一応二部存するのを含め、台北の中央図書館（北平）に四、天理図書館に二、北京図書館に一本、ごく明初までの修の善本が存する。

中央図書館の善本書目には、まず明の南京国子監二十一史本として用いられた四部が列挙され、そこには全二二五卷釈音二五卷の完本もあるが、一二五頁に移って旧北平本になると、同じく四部がすべて非常に善本であるが、全巻を具備するものは

ない。

この四部のうち、第一のものが原刻本であり、他はいずれもほぼ同期の元末明初修本であるから、以下、この善本書目著録の順に採りあげることにする。

存一六〇卷

卷一 一・三四・四二・四七・五一・七二下・七二下
卷二 一・八二・八七・九七・一〇〇・一一二・一二〇
卷三 一・一三〇・一三二・一五二・一六三・一六四・一六七
卷四 一・一九一・一九八・二〇二・二〇八・二二四・二二三
卷五 一・二二五・二二五・二二五・二二五・二二五・二二五
釈音卷九 二二五

元大徳二一年建康路儒学刊 六六冊

首目・本紀はまったく欠け、志一から存して、志・表・伝・釈音はときに欠巻はあるものの、ともかく一六〇巻を擁する。

これがすべて原刻本であって補刻は皆無であり、各冊首尾に必ず下のよ

國子監崇 借読者必須受
文閣官書 護損壞闕夫典
掌者不許收受

うな印が捺されている。印面は鮮明で、まことに珍重すべき本である。ただし、料紙が竹葉らしいものを含んでいかにも弱く、四周の破損は甚しい。粘葉装のために印面にはさほど及んでいないが、版心の部分は影響を受けている。保管の状態も必ずしも適切でなく、今後の保存に不安を禁じえない。そのため、卷一〇六・一一五・卷二二五下と釈文一七卷の閲覧は遠慮させられたが、むしろこれは当然であっ

て、封特蔵組長らに最優先の裏打補修を要望したが、良い技術者がいないために、むしろ明版から補修に着手し、宋元版は躊躇しているという残念な話であった。

さて、この本の装訂は褐色表紙（三二・九×一九・九_{チセン}）、「唐書十一之十四_{礼楽志}」のような墨筆題簽を貼り、粘葉装である。多くの巻に、一巻ごとの葉数を記した挿紙がある。「京師図書／館収蔵之印」。

巻一を欠くので、匡郭・版心等については次に記し、刻工名についても後に一括して掲げる。

存一六三卷（_{一〇四六・五五〇下七二・七六〇八一・八九九}
_{九六・一〇四一・一七三・一八一・一九六・}
_{二〇二・二〇七・二二四・二二六・二二二下二二五}）

元大徳一一年建康路儒学刊〔元末明初〕修 二七冊

中央図書館善本書目には存一六〇巻とあり、下巻だけの存在をどう数えたかに疑問もあるが、明らかに一六三巻と認められるので、標記は通巻数次を示したが、ここに同目録通りの紀志表伝別の存巻次をも提示しておく。

紀一〇一〇 志一三六・四五〇 表一六・一〇下二二
伝一六・一四二・二九四・五五九八・一〇六・一一・
一二七・一三二・一三九・一四一・一四六下・一五〇

暗藍色表紙（三〇×二〇・八_{チセン}）、「唐書志_{第一之第十卷}」のような墨筆題簽。ただし、第一・二冊は新補紺色表紙で裏打補修。

首に嘉祐五年曾公亮の進新唐書表と唐書目録があり、「本紀第一（隔七格）唐書一」と題し、欧陽修奉勅撰の長い銜名があって、本文に入る。左右双辺（二二・二×一五_{チセン}）、一〇行二字。版心は白口で、ときに字数を刻し、双魚尾の間に「唐書巻一」のように題し、下方に丁付とときに刻工名を記す。唐書積音はなく、嘉祐五年の中書劄子が巻末に附刻されている。稀に、比較的かたまった形で元末明初、おそらくは明初の補刻葉があり、それがときに線黒口であり、その多くは字様から識別できるが、やや不明確の場合も前掲の原刻本との対比で確認できる。巻九八・一一〇には補刻葉が集中し、おそらく全葉がそうであろうとみられる巻も少からずある。

巻一第六・八・九・一二葉、巻五第七葉などが欠葉。

目録末に「余住治城之日市紙命工就成均印漢書並此書全是書綴四十帙／予章清字黄圭中志」とあるのをはじめ、巻二下と巻四末に「清宅道人黄彦直圭中識」、やはり巻二下の尾に「余住治城自得是書綴為四十冊清字道者志」との識語が書入れられている。

存一〇〇卷

卷一	七・二一・三〇・五三・六〇・六八・七一
二	九・一二・一六・二一・二五・二八・三一
三	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
四	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
五	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
六	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
七	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
八	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
九	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
十	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
十一	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
十二	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
十三	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
十四	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
十五	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
十六	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
十七	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
十八	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
十九	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
二十	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
二十一	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
二十二	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
二十三	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
二十四	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
二十五	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
二十六	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
二十七	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
二十八	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
二十九	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
三十	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
三十一	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
三十二	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
三十三	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
三十四	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
三十五	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
三十六	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
三十七	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
三十八	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
三十九	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
四十	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
四十一	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
四十二	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
四十三	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
四十四	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
四十五	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
四十六	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
四十七	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
四十八	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
四十九	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
五十	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
五十一	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
五十二	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
五十三	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
五十四	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
五十五	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
五十六	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
五十七	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
五十八	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
五十九	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
六十	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
六十一	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
六十二	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
六十三	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
六十四	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
六十五	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
六十六	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
六十七	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
六十八	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
六十九	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
七十	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
七十一	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
七十二	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
七十三	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
七十四	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
七十五	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
七十六	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
七十七	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
七十八	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
七十九	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
八十	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
八十一	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
八十二	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
八十三	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
八十四	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
八十五	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
八十六	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
八十七	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
八十八	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
八十九	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
九十	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
九十一	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
九十二	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
九十三	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
九十四	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
九十五	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
九十六	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
九十七	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
九十八	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五
九十九	一・一五・二〇・二五・三〇・三五・四〇
一百	五・一〇・一五・二〇・二五・三〇・三五

元大徳一一年建康路儒学刊「元末明初」修 三三冊

紺色表紙（三四・九×二一・七センチ）、「唐書^{一之四}本紀^{一之四}」のような

墨筆題簽、粘葉装。

進新唐書表と唐書目録があつて、本文に入る。つまり、この後の印本に誤って混入しているような靈謙の跋などはない。

宋の董衝の唐書釈音二五巻は、目録の存九巻の他に、前後に零葉が四葉だけ存する。

目録からして明初と思われる補刻が数葉あり、版面が欠損し、また埋木をしたところもある。第二本（存一六〇巻二七冊）と比較したところ、補刻葉はもちろん、匡郭や文字の版木の損傷もほとんど同じであつて、非常に近接した時期の印本と思われるが、欠葉がより多く、なかには両本とも欠ける葉もあるが、前者の原刻葉がこの本では失われている場合も少なくて、いささか後印であることを思わせる。

存一二五巻

卷一	五・二三上・二六・四九・六四・六九・七
二	下・七五・八八・一〇五・一一〇・一二・一
三	一・二六・一三二・一三八・一四二・一六二・一
四	六・九・一七九・一九五・一九九・二〇〇・二〇
五	四・二二・一
六	九・二二・一
七	二・二二・一
八	一・二二・一
九	五・二二・一
十	一・二二・一
十一	五・二二・一
十二	一・二二・一
十三	五・二二・一
十四	一・二二・一
十五	五・二二・一
十六	一・二二・一
十七	五・二二・一
十八	一・二二・一
十九	五・二二・一
二十	一・二二・一
二十一	五・二二・一
二十二	一・二二・一
二十三	五・二二・一
二十四	一・二二・一
二十五	五・二二・一
二十六	一・二二・一
二十七	五・二二・一
二十八	一・二二・一
二十九	五・二二・一
三十	一・二二・一
三十一	五・二二・一
三十二	一・二二・一
三十三	五・二二・一
三十四	一・二二・一
三十五	五・二二・一
三十六	一・二二・一
三十七	五・二二・一
三十八	一・二二・一
三十九	五・二二・一
四十	一・二二・一
四十一	五・二二・一
四十二	一・二二・一
四十三	五・二二・一
四十四	一・二二・一
四十五	五・二二・一
四十六	一・二二・一
四十七	五・二二・一
四十八	一・二二・一
四十九	五・二二・一
五十	一・二二・一
五十一	五・二二・一
五十二	一・二二・一
五十三	五・二二・一
五十四	一・二二・一
五十五	五・二二・一
五十六	一・二二・一
五十七	五・二二・一
五十八	一・二二・一
五十九	五・二二・一
六十	一・二二・一
六十一	五・二二・一
六十二	一・二二・一
六十三	五・二二・一
六十四	一・二二・一
六十五	五・二二・一
六十六	一・二二・一
六十七	五・二二・一
六十八	一・二二・一
六十九	五・二二・一
七十	一・二二・一
七十一	五・二二・一
七十二	一・二二・一
七十三	五・二二・一
七十四	一・二二・一
七十五	五・二二・一
七十六	一・二二・一
七十七	五・二二・一
七十八	一・二二・一
七十九	五・二二・一
八十	一・二二・一
八十一	五・二二・一
八十二	一・二二・一
八十三	五・二二・一
八十四	一・二二・一
八十五	五・二二・一
八十六	一・二二・一
八十七	五・二二・一
八十八	一・二二・一
八十九	五・二二・一
九十	一・二二・一
九十一	五・二二・一
九十二	一・二二・一
九十三	五・二二・一
九十四	一・二二・一
九十五	五・二二・一
九十六	一・二二・一
九十七	五・二二・一
九十八	一・二二・一
九十九	五・二二・一
一百	一・二二・一

元大徳一一年建康路儒学刊「元末明初」修 四九冊

暗藍色表紙（三七×二二・九センチ）、「唐書^{一之四}目録^{一之四}」のような墨筆

題簽、粘葉装。

進新唐書表に次いで、後漢書と同じ大徳九年の雲謙の跋が続き、そして前掲の戚明瑞の序と列銜とがあるのである。この序と官銜を持つ本は、おそらく現存唯一であろうと思われる。巻末に嘉祐五年の進呈官銜と中書劄子がある。旧京書影は多分この本から曾公亮の上表の第二葉裏（256）・雲謙跋の第二葉表（257）・礼樂志九第一葉表（258）を影印しているが、これらは明の南監二十一史本にも含まれているものの、その多くは補刻である。とくに雲謙の跋は、この本および旧京書影には金鑄という刻工名が明記されているが、南監本にはそれがなく、恭仁山莊善本書影のものにもなく、字様も明らかに異っていて、明嘉靖ごろの補刻としか思えない。しかし、いずれにしても後漢書の跋が明初には唐書の方に移されていたことが明らかであり、当の後漢書はやはり旧北平図書館蔵本の存四二巻一四冊が一部、

現存するばかりであるが、巻首および巻尾を欠いているせいもあって、この序跋は附いていない。

前掲本と同じく明初の補刻があり、ほぼ近い時期の印行と思われる。

「京師図書／館收藏之印」。

右の四本を通じて、刻工名は単字のものが多く、姓名を録するものは二〇名ほどにすぎないが、次にこれらを表示する。むろん第一本にはないが、補刻は元末からおそらくは明初に入ってからのもので、主な者は前稿の南北史などと共通し、南京国子監の命によったかと思われる。

この原刻刻工のなかに、括蒼の地名を冠する翁氏が二名いる。括蒼は浙江省南部の麗水の東南方で、ここから杭州、建陽、北史を担当した信州路の上饒などへ、いずれもほぼ等距離になる。両翁以外の刻工もすべてこの地の者であるとは考えないが、建康路（江寧）担当の唐書に遠い括蒼の刻工が使われているということは、刊地と刻工の居住地とを安易に結びつけてはならないことを示唆している。

3 弋辰印 4 中成 5 玉泉 6 仲文 8 周昱 孟文 於世榮
9 俞榮 姚德昌 施惠 胡勝 茂之 10 括蒼翁清隱
括蒼翁勝実 翁舜卿 11 陳相 陳樞 陳壽 陶桂岩
15 德昌

人之于子夕万_レ仁公天中介文木包古正
王永存共成羊吳秀李良肖孟沈周於東俞姚
洪茂茅翁張陳陶堅曾勝菜楊誠賈榮鄭蔡霍
樊 (以上原刻刻工)

4 巴友 王安 王仏生 5 付庚 6 朱大存 朱禾 朱伯禾
江厚 7 伯川 何敬 吳五 吳睡 吳榮二 沈中民
8 周東山 周春 周鼎華 季七十 11 張伯勿 張伯灝 張堯名
張広 張広祖 章良之 郭生 12 黃道正 13 楊成 葉就
14 趙川 趙伯川 15 劉子和 18 戴添与
丁刁之子川山仁云中元文月王木付目民丙
禾存羊吳宋呂走谷沈宗孟易是炳孫曹集焦
楊鼎寿 (以上補刻刻工)

右の中央図書館の北平本四部が、それぞれ残本ではあるものの、かなり残巻の多いものであるから、四本にすべて共通して

存する巻もあるが、なお巻四九下・五〇（志三九下・四〇）・八八（伝一三）の三巻は欠巻となる。

ところで、わが天理図書館に、やはり明初修とみられるこれらに次ぐ善本が二部ある。一は惜しむらくは三巻一冊を欠くがほぼ全巻本であり、もう一は零本一卷と極端であるが、前者に北平本の欠く三巻は存する。ただ、志四〇が四葉、伝一三は二葉を欠くのが残念ではある。

存二二二巻（欠巻四四・四六志三四・三六） 釈音二五卷

元大徳一一年建康路儒學刊「明初」修 後印 一〇〇冊

第二一冊、選舉志上下と百官志一を欠く。後補水色表紙（二八・六×一九・一^{ナナ}）、櫛装。釈音二五卷 宋董衡撰を具え、首に進新唐書表、本文末に同じく嘉祐五年の進呈官銜が附く。

補刻刻工は北平三本より増えておらず、原刻葉もかなり残っていて、同じく明初の修本とみてよい。しかし、版面の摩滅はかなり進み、補写葉が一〇〇を軽く越えるから、印行はかなり降るものと思われる。

この唐書の南監本には、成化一八年（一四八〇）と弘治三年（一四九〇）の補刊記をもつ葉があるが、この本にはこの兩年の補刻はみえないから、成化一八年直前の印行になったもので

あろう。北平三本の補修よりは八、九〇年を経ているとみてよく、嘉靖の大補修まではなお三、四〇年の期間がある。

本紀・列伝の一部に朱句点・圈点・傍点が付けられ、眉上に墨筆で注記・評語の類が記入された場合が稀にある。

蔵印は、「項子京／家珍藏」「項墨林父／秘藏之印」「墨林／秘玩」「朱／十」「彝／尊」（陰）、「吳氏／觀光」「吳氏／珍藏」（陰）「吳印／葆光」「恭甫／吳壽／齡印」（陰）「吳壽／齡印」「壽／齡」（陰）「仲勤／次賞」「吳氏／家藏」「恭／父」「叙心賞」「平生／真賞」「子／經」「曹印／禎驥」「汪七紱／貽字孫／書画記」「橋／李人」（円）等がある。

零本（存卷九五高麗列伝二〇）

「明初」修 一冊

高儉・竇威両一族の列伝一卷、わずか一二葉の零本であるが、全葉、原刻である。しかし、北平各本はもとより、前掲の成化直前印本もこの巻には補刻がなかった。この一卷はたしかに原刻本であるが、版面の状況からみて、僚巻もすべてそうであったとはとても考えられず、北平本を実査したあと、再び天理へ赴いて確認したのであるが、明初修・明初印本のうちの一巻と考えるのが妥当である。したがって、やはり原刻本と称するのはふさわしくなく、「明初」修と標示した。

他の目録・書誌類では現南京図書館の江南図書館善本書目および江蘇省立図書館覆校善本書目では、釈音を含めて全巻を具備し（有欠葉）、五〇冊。「元大徳建康路刊本 有雲間姜子図書一印」とあるが、善本蔵書書室志著録本は、釈音とこの印の存在に触れず、戚明瑞の序と校勘官一二名の官銜のあることをいい、同一本ではないようである。したがって、やはり原刻本と称するのはふさわしくなく、「明初」修と標示した。

後補紺色表紙（二七×一七・七_{センチ}）、外題は「元槧 唐書九五卷」と朱書、襖装。「天理図／書館蔵」印。

北京図書館善本書目には「元刻本」と称して「建康路儒学」とは明記されないものが二部、ほぼ次のように著録されている。

二二五巻目録二巻 元刻本（巻一六五配清影元抄本） 一八〇冊

存二二四巻 （欠巻一〇三）元刻明修本（巻一〇四・一一八・一三五・一四四・一四八・一四九・一五一・一五五・一七二・一七四・一七六・一七八・二〇七・二〇九配另二元刻本） 二二〇冊

前者は模写の一卷を除いて元刻本であるというが、建康路儒学刊本であるか疑問なのは、その目録は五〇葉あるが、上下二巻には分たれてはいないことである。これは南宋紹興刊本（いわゆる嘉祐刊本）などにみられる形式であるが、一卷を二分冊にする場合がないとはいえない。いずれにせよ、実査しない限り

りなんともいえない。

後者も同じで、元刊本の種類はごく少いから、元刻明修本か補配の另一元刻本のいずれかは、建康路儒学本としか考えられない。

しかし、唐書の元刊本は、いまのところは他に南宋中期建安魏仲立宅刊本を元天曆二年（一二三九）に覆刻したものしか知られておらず（宋刊新唐書について）、私はおそらくそれ以外に刊刻されたことはなかったと推定している。

そして、この本の目録は二巻に分れているから、前者はあるいはこれであるかもしれない。そうであるとしたら、この本は静嘉堂文庫・大垣市立図書館・大倉文化財団（集古館）等の蔵するところであるが、覆宋本であるだけにとかく宋刊本とされがちなのを、北京目録が元刻としたのは卓見といわねばならない。大垣・大倉本は明の宣徳一〇年まで通修されているから、元刊明修本であるし、また建康路儒学本も明南監でその二十一史に用いられたから、まったく同様の標記ができる。したがって、後者は、どちらがどちらかわからないが、この両本が寄せられているものであろうか。

康熙五・二〇年

(欠釈音)

四二冊 東文研

(欠卷一・六〇)

二七冊 書陵部

三九年

五四冊 内閣

雍正七年

四八冊 国会
(含二八冊)

四四冊 静嘉堂

四四冊 東文研

乾隆五五年

四八冊 内閣

このほかに目録上では、北京図書館には前述したように、「另一元刻本」を含む明修本存二二四卷一二〇冊があったが、あるいは明修は嘉靖ないしはそれ以後に及ぶものであるかも知れず、さらに左のようなものが見られる。

明補版本

上海図書館

明南監二十一史 新唐書二二五卷 新唐書二二五卷 雜刊配本(抄

配)

四八冊

(江蘇第一図書館覆校善本書目
江蘇省立国学図書館図書総目)

嘉靖修本のごく一部の版心上象鼻に、明の成化一八年(一四八二)と弘治三年(一五〇八)の補刊年記のある葉がある。ただし、このときの印本は伝存せず、嘉靖八・一〇(一二)年修

本にみえる。

成化一八年の修葉は比較的多く、弘治のものはいくつか、いずれもその下象鼻にほとんど版下抄手らしい監生の名が刻されている。概して一部の前半には、「監生廖縉亨上」のような形式で、おそらく右側に書写者、左に校対者、そして下方(これは左下にも中央下にもある)が刻工の名ではないかと思われる。後半では、右側の版下抄手名だけの場合が多くなり、それにしばしば刻工名らしいものがつく。これら二、三人の組合せはわりに共通しているかにみえるが、やはりいろいろあるから、一応、版下抄手(以上左)、校対者(以上右)、刻工名(下)と分けて左に掲げることにする。前二者にはほとんど「監生」の二次が冠せられているが、ここでは省略する。

何清 新昌李弼 汪鑑 周祚昌 俞廷 広信俞廷桔 胡泉

徐英 徐讓 徐讓寸 曹広 陶玉 陳成章 陳章

廖晋 廖縉 盧奎 謝遂 簡玉寸 (以上右)

田方 李宮 徐郁 張仕 曾伯 曾伯中 黄慶

雷俊 鄭琦 (以上左)

上 于 太 王玉 王珍 方心 尔 名 対 甫 冠 肖

肖御 吳 叙 志 木 珍 吳 瓊 寸 禾 其 (以上下)

弘治三年の補写葉の下象鼻には、ときにやはり版下抄手である者の名が四あり、同じく「監生」の二字を冠している。

吳用行 孫惠 孫魯 羅辺

次で、嘉靖八・九・一〇・(一一)年にわたる大補修をもつて、南監二十一史が整備されたわけであるが、以後、明代はもとより、清の康熙・雍正・乾隆にいたるまで、またこの唐書には発見できなかったが、ことによると嘉慶二年まで、たび重なる補刻が重ねられたので、これについては前に表示した通りである。嘉靖の刻工は南北史等とほぼ共通し、すでに提示した者が大半であり、それ以後の刻工あるいは捐者も、ここではとくに必要と思えないから省略する。

五代史記

歐陽修の五代史記は、たとえば宋史卷三一九の同伝に、

奉詔修唐書紀・志・表、自撰五代史記、法嚴詞約、多取春

秋遺旨。蘇軾敍其文曰、「論大道似韓愈、論事似陸贄、記

事似司馬遷、詩賦以似李白。」識者以為知言。

などと書かれているように、きわめて好評であったが、これが世に出たのはその歿後であった。郡齋讀書志(衢州本卷五・袁州本卷二上)に、

皇朝歐陽脩永叔、以薛居正史繁猥失実、加修定、藏于家。

永叔歿後、朝廷聞之、取以付国子監刊行。……

とあり、その刊刻の時期は玉海卷四六所引の中興書目に、

熙寧五年八月十一日、詔其家上之。十年五月庚申、詔藏秘閣。

というから、一〇年(一〇七七)以後の間もないころであったであろう。

その北宋刊本の伝存を耳にしたことはないが、おそらくその覆刻本かと思われる南宋初期刊本が一部だけ台北に存する。

南宋初期刊同前期修本

七四卷 [南宋初期] 刊 [同前期] 修 (補写卷三四、四一・四九・五〇・五五・五七 計一三卷)

一八冊 中央図書館蔵

中国訪書志増訂本四六〇頁に詳説される。

後補紫色絹表紙(三〇・八×一八_{センチ})、金讓玉装、原料紙高さ

二五・七_{センチ}。首の陳師錫の五代史序は補写、続く五代史記目錄

も首七葉は補写である。

本文首葉は補刻であるが、「五代史記卷第二／（低一〇格）歐陽脩撰／（低二格）徐無党注／梁本紀第一」と題する。左右双边（一六・八×一一_チ）、有界一二行、行二一～二二字・注文小字双行二四～二七字。版心白口・単魚尾・「史本紀一」のように題する。丁付と稀に刻工名を刻する。原刻より補刻の葉が多く、卷一は原刻四に補刻四、卷二は一と四、卷三は二と二、卷四が二と六といった割合で、以下はほとんど補刻葉が圧倒的に多い。

刻工名には次のようなものがある。

10 郎和 11 陳用 陳忠 12 屠適

中王壬用亨杞汴玘言周孟忠胡信恭梁郎連

陳屠華機適（以上原刻）

5 付先 6 安上 12 華元

上下万公元付尔立先全何宗奇徐夏華貴黃

源董蔣（以上補刻）

避諱欠筆は、玄朗敬弘殷匡胤貞の各字に行われてい
るとされる。中央図書館の李清志氏に精査を依頼したところ、
原刻葉にも部分補修のところに勘の欠画が存在するという

（卷四第六葉末行）。前述の通り、五代史記が歐陽修の遺著とし
て秘閣に収められたのは熙寧一〇年であり、神宗の在位はその
後八年も続くから、その間に開版されたことは確かである。い
ずれにしても南宋には及んでいないし、行格も北宋版の風を強
く有しているから、北宋本の覆刻の可能性は濃い。そうであつ
たとして、在位中に雕版に付されたとしたら、北宋においても
今上避諱が行われた一つの例となろう。あるいは部分といえど
も明らかに補刻であれば、次代以降に行われた欠筆でもありう
る。また、補刻には弦鉉朗驚讓勘にもあるとされるが、
ここにも南宋の避諱はみられない。

補写がかなりあり、卷三四～四二第三葉、卷四九・五〇・五
五～五七の一三卷余と、卷二二第四葉、卷四二第一〇葉、卷四
七第一二葉、卷五一首三葉、卷五四第一〇・一一葉、卷六一第
九葉、卷六八第二葉、卷七一第八葉、卷七三第七葉、卷七四首
二葉などである。

蔵印は「古家館」（陰）「東宮／文庫」、「楊印／守敬」（陰）「星
吾海／外訪得／秘笈」、「雲輪閣」「荃孫」「費印／念慈」（陰）「紀
懷／父」「西蠡／経眼」（陰）「貴池劉世珩鑑蔵経籍金石書画記」
「聚学／書蔵」「聖順秘笈／識者宝之」「宜春堂」（櫚）「葱石読書

記」(陰)「宋本」「伯／庚」(形)と多く、楊守敬がわが国から購得したことも示している。また、後述するが、貴池劉氏が一九一一年に影印している。

日本人の校字書入の附箋もある。

この本は私も閲覧してその結果も含めたが、以上はほぼ中国訪書志によっている。同書は楊氏の日本訪書志に「此書開卷題五代史記、与各本不同。別本皆有曾三異校定、宋槧歐陽居士集、亦有三異考異、此本無之、則為北宋槧無疑、字画古雅、饒有歐書化度寺筆意。間有補刊、亦端正、不苟相其紙質、雖是明代所印、然不害、為宋刻佳本」といって北宋刊本としたのを、刻工名によって南宋初期刊本と訂した。すなわち、原刻の陳忠・陳用、補刻の華元・付先が、いずれも南宋初期(紹興中)ないし前期刊と認められる史記集解・明州刊文選・臨川先生文集・白氏六帖事類集(天理図書館蔵本)・越刊八行本周礼疏・淮南路転運司刊史記・新唐書・思溪版藏経にみえるからで、南宋初期刊・同前期修かと推定されている。

先に新唐書のいわゆる嘉祐刊本が、直齋書錄解題や建炎以来繫年要録等によって、紹興七年ごろに湖州思溪円覚藏経の余板をもって、五代史記とともに刊刻されたことを証した(宋刊新

唐書について)。この五代史記も唐書と一人(補刻葉だが年代差は小さい)、思溪版と二人の刻工名が共通するから、これが湖州の五代史記に該当するかとも思われるが、あまりにその数が少い。それは一つにはこの本は原刻葉があまりに少く、比較の対象として乏しすぎるのである。原刻葉の残存がもっと多ければ、両本との刻工の合致がはるかに増えるかも知れまい。また、匡郭の大きさが、五代史の方が縦で五・六_{センチ}、横で三_{センチ}小さく、行格も每半葉二行、毎行三ノ四字は少いのであるが、それは二・五巻に対する七・四巻という分量の差によるのかも知れない。

しかし、いずれにしてもその可能性はあるが、といってそれと断定しうるだけの資料としてややものたりず、それはまた同時期の他の刊本との共通刻工の乏しさにも、同姓同名者もいることであるし、不安を禁じえない。とはいえ、これらの資料や版式から南宋前期を降ることはないと思われ、傳氏旧藏本との比較が望まれてならない。

なお、楊氏のいう曾三異校本とは、次掲の南宋中期建刊本、および元代のその覆刻本である。

中国訪書志はさらに続けて、傳増湘の雙鑑樓善本書目と藏園

羣書題記卷一の北宋本五代史記跋、および王文進の文祿堂訪書記に、これと行格を同じくする一二行・二二字（後者は二一字至二四字という）本が、それぞれ首一二卷、および卷一三と卷一五半葉という零本ながら、著録されていることに触れ、ともに北宋刊とすることを否定しつつ、刻工名からこの本とも別版であることを述べている。

藏園羣書題記および文祿堂訪書記によれば、いずれも下象鼻に字数と刻工名が刻されるとし、前者には高安礼 能煥 吳世榮 徐信 高安道 吳信 蔡侃 王受 吳小二、後者には王立 王受 高安礼 高智広 高安道 高智立 吳俊 吳世榮 吳小二 熊煥 徐信 蔡侃という刻工が挙げられている。これらは両記にはほとんど共通するから、同版であることに疑いはないが、この中央図書館本の者とは一人も合わず、したがってこれとは別版であるとされるのに、私も同感である。ただし、高安礼 高安道が南宋前期のうちの後半ないし中期初の杭州地区の刊本、たとえば紹熙元年序刊坡門酬唱、淳熙刊撫州公使庫刊札記、春秋経伝集解にみられるから、ほぼ同時期に同地方で、このような似た本が二種存するについて、その関係に疑問を投げかけている。

なお、この中央図書館現蔵本は、宣統三年（一九四一）、當時所有の貴池劉世珩によって影印された。封面の裏面に「貴池劉氏玉／海堂景宋叢／書之七宜統／建元十月付黃田陶子麟／刻三年辛亥／閏六月竣工」とある。補写の部分も、ほぼその通りに行われている。

また、北京図書館善本書目には、宋刊本としては、

七四卷	宋刻本	（卷九・二一配明刻本 卷六一・七〇配明抄本 他卷欠葉配元刻本及另一明刻本）	一六冊	瞿捐
存一四卷（一至一四）	宋刻本		三冊	周捐

の二本が著録されている。前者は「慶元五年曾三異校定」のあ
るべき卷一八が補配本であるが、次々節で述べるように、これ
はその南宋中期の慶元五年刊本を元の中期に覆刻したものと考
えられ、後者はこの目録で始めて知る本で、しかも卷一八が欠
巻であって、実見していない以上なんともいえないが、北京目
録の体例上からは前者と同版かとみえ、いずれも南宋慶元本と
はとも考えられない。

南宋慶元五年建安刊曾三異校定本

五代史記の百納本は、序目一四葉は一二行二二字の補写らし

いが、本文七四卷は一〇行一八字、字様も史記黃善夫本の系統を引き、卷一八尾に「慶元五年魯郡曾三異校定」の一行を持つもので、当時傅氏雙鑑樓藏本を底本とし、当然、慶元五年刊本とされている（雙鑑樓善本書目は三年と誤記）。

この本には、徐無党注のほか、ときに「（曾三異校定曰：……）と双行の注が入っていて、また卷二三等五卷末に「魯郡曾三異校」の一行もあり、したがって慶元五年校定本は実際に刊刻され、史記黃善夫本・兩漢書劉元起本・唐書魏仲立刊本、さらには刊者不明ながら三国志・晉書・南史・北史・隋書に同じ行格の本があるから、おそらくはこれを含めて十史を形成していたに違いあるまい。

そして、避諱欠筆も慎、敦字に至っているから、慶元という刊年にも疑問はない。

しかし、百衲本のほかにもこの同版本はいくつかあるのであるが、晉書と同様、実査したもの、書影のあるものはすべて、元代の覆刻本であると私は確信している。

それは版式や刻工名によるが、やや主観的な面が否定できないものの、新唐書について、南宋中期建安魏仲立宅刊本を、元天曆二年（一三二九）に覆刻本が出されたことに照らせば

（前掲^{宋刊新}唐書について）、その系列の覆刻本であることが明瞭である。

覆刻本には、慶元五年の年代は冠しないものの、卷二三・二四・三四・五七・五八の各卷末にも「魯郡曾三異校定」の七字がある。曾三異については、張氏が校史隨筆に考証して、

按中興閣統錄、曾三異、臨江軍人。端平元年三月、以承務郎主管潭州南嶽廟、充秘閣校勘。二年九月、徐太社令。

又宋史藝文志、有曾三異宋新旧官制通攷十卷、又宋新旧官制通攷二卷。直齋書錄解題、周益公解相印、編定六一居士集、属旧客曾三異校正、益完善無遺恨云云。是三異必一學識淹貫之士、且甚服膺歐公者、故於校正六一居士集外、又校刊是史也。雍正江西通志、称三異為三聘弟、三聘宋史有伝、臨江新淦人。三異乃自署曰魯者、蓋追記其祖籍耳。というのに尽きるであろう。

いま、曾元異校定直後の宋慶元の原刻本の存在を聞かないが、次節にその覆刻本について述べる。

元覆南宋慶元五年建刊本

前述の通り、慶元五年刊本は現存しないものようであるが、私はその元代の覆刻本とみる本は、原刊本としていくつか著録

されている。私どもの実査できた中央図書館本は明代までに至る通修本であり、原刻葉の残存はきわめて少い。しかも、その本文がほとんど読めない場合も珍しくなく、補刻葉にも摩滅して補筆された例さえかなりある。

百衲本もまたこの版を慶元本として採用したが、この傅氏雙鑑樓本には補刻はないらしく、字様もかなり南宋中期建刊本に似て、まずは忠実な覆刻本というべきである。とくに鉄琴銅劍樓宋元本書影に所掲の巻一首葉は、書影が大型のせいで、百衲本より原刻本らしく見せかける。また百衲本は、その巻首に捺された「建安楊氏／伝家図書」、「毛鳳／苞印」「子晋／氏」「奏卡」「毛表」、「鉄琴銅／劍樓」「在処／有神物／護持」等の印記を、一部は「徐無党」などの文字に重ねられているためか、消してしまっている。

鉄琴銅劍樓蔵書目録も宋刊本と称するのはやむをえないようなものであるが、「匡微貞字皆減筆」として実在する南宋中期の慎敦燉に触れないこと、「板式甚工旧」などと称することは、いかにも当時の解題ではある。

この本は現在、所在不明であるが、ともかくここに影印され

たことによって、現在の後修本からではできない刻工名や欠筆を検出しうることは貴い。以下に掲げる刻工名は、そのような元明通修本にはないものも、ここから採録して含めてある。

なお、首の五代史記序と五代史記目録、およびその尾に付く「徐無党曰……」は達筆の補写であるが、毎半葉一二行と行格を異にする。しかし、序の首に「榮□／□□」の印記がみえるから、在雙鑑樓以前から備えられていたものと思われる。

以下、中央図書館本について記すが、中国訪書志に詳述されており、私も実査したが、記述がこれとかなり重複するのはやむをえない。

七四卷 宋曾三異校

〔元〕覆宋慶元五年刊本

〔明〕通修

二四冊 中央図書館蔵

新補茶色表紙（二七・二×一六・七_{センチ}）、金讓玉装、原料紙高

さ二六_{センチ}。首に五代史記序（陳師錫）、五代史記目録。本文は

「五代史記卷第一／梁本紀第一（隔三格）歐陽修撰 徐無党註」と

題して始る。左右双辺（一九・五_{センチ}×二二・三_{センチ}）、一〇行・一

八字、注文は小字双行で行二二字前後。版心は白口で双黒魚尾、その中間に「五代一」のように題し、上象鼻に大小字数、下象

鼻の上方に丁付と下方に刻工名を刻する。耳格に篇目を示す。

序目には原刻葉が一〇ほども残っているが、漫漶が著しくてあまり読めず、本文には原刻はごく稀である。明修は粗黒口で、一見して識別できる。卷二第三葉以下、しばしば版心下方に「丁亥」とあり、これが第一次修と思われるが、永樂五年（一四〇七）は無理で、おそらく成化三年（一四六七）であろう。

そして、中央図書館の宋本図録などは正徳六年（一五一一）の補刊年記があるとし、正徳六年に至る通修本とされる原因となっている。しかし、私は短い調査時間に正徳の補刊年記を発見できず、やはり中央図書館善本組の李清志氏に精査を依頼したところ、それは皆無の由である。宋本図録がなんらかと混同したものであろうが、したがって、次掲のこれよりやや後印の二〇冊本には、正徳六年修のことに同書はまったく触れないのである。新唐書の同じ元の覆刻本には宣徳九・一〇年（一四三四・五）の補刊年記があり、先にこれから推して「丁亥」を成化三年とみたのであるが、明の通修は正徳ごろに終わっている。刻王は単字のものが多く、二字でもおそらくみな姓を欠くようであるが、ほぼ左の通りである。

4 卞玉 6 仲甫 仲明 7 伯茂 君六 君和 8 東山

11 国用 13 愛之 程元 15 徳祐 慶之

山元王文用正目仲成伯枝君徐高国善遠徳
このうち、国用・愛之・程元の三名は、新唐書・晋書の覆宋刊本にあり、仲甫・仲明は、長沢規矩也氏の元代刻工表によれば、宋刊の宋文鑑（静嘉堂蔵）の元修部分と、一〇行本十三経注疏の元刻部分にあるという。単字の方は大半が共通する。しかし、姓名が揃っていないし、数が少いから、私はかれらが全く同一の刻工と断定しにくい。可能性はある。少くとも南宋中期建刊十史の他の本に刻工名のあるものではなく、版心上象鼻の大小字数も極めて稀である。それらを、この本はほとんど刻している。

加えて、字様には黄善夫本史記以下の南宋中期建刊各史ほどには鋭さが欠け、右上りの気が乏しく細身になり、丸味を帯びて、なによりそれらより、元の覆刊本の唐書に似てきている。さらには、元の建刊本に多い字書・韻書・類書等に共通する字様に近づいている。

元代に十史がすべて覆刻されたとは限らず、いま確認できるのは唐書、そしてこの晋書と五代史だけである。なお、南宋初の曾三異の校というのは、覆刻本がそのまま原刻の校記を再刻

したのにすぎない。従来、すべてこれをもって慶元刊本としてきたのは誤りである。

七四卷 「元」覆宋慶元五年刊本「明」通修 二〇冊

もう一本であるが、新補紫色表紙（三二×一八センチ）、襷装、表紙に外題その他の記入があるが、これはあえて後に述べる。前掲本より後印で、正徳以後の補修があるかとみられる。

「朱樹／私印」(陰)「子／清」「桐華／別館」(陰)「我齋／圖書」

「抱蜀／子」「季魯／氏藏」「博爾濟吉特瑞誥收藏」「翰鵷博爾濟吉特氏／匏石宦主／人審定金／石書画印」「西拉木梭／瑞誥

収／藏書籍」「鳳倫／秘笈」「鳳倫審／定謝小韞侍」「南海／謝小

韞」の蔵印がある。後二者のうち、瑞誥は首冊に題記を手書

し、謝小韞は、外題に「元七十四卷都二十冊宋槧五代史一冊」(印章は

「鳳倫四十後作謝小韞侍」と明記し、右肩には別筆で「此慶元刊曾三異刻本

／元明補版甚多」とある。すなわち謝小韞は、すでにこれが宋刊本であることを疑い、元の覆刻本と見做していたのである。

なお未見であるが、善本書室藏書志・江南圖書館善本書目・江蘇第一圖書館覆校善本書目・江蘇省立國學圖書館圖書總目と引継がれて著録される二四冊が、蓋山書影にも卷二六第五葉表

の書影が掲げられ、丁志以下の記述によってもこの覆刻本の明修本であり、蓋山書影には全書八九九葉とある。丁志に「虞山塾老印」「彬侯印」のあること、卷一後に朱筆で「戊戌正月二十四日用葉石君所藏旧監本子対読」、末に「崇禎戊寅臘月廿三日收藏」等の跋があるという。

旧京書影(261)(262)に卷二八之一九(尾題だけ)と卷五六首葉が掲載されているが、現存しないらしい。

わが国に伝存することを聞かず、意外に稀本である。

元大徳九路儒学刊本

元大徳九路儒学刊十七史が実は南北朝七史を除いた十史であることは、しばしば触れてきたが、その終幕の五代史記は存在するようである。刊記や刊地をいっさい記さず、続いて用いられた明の前中期ごろの修本に「崇文書院」の名が現れるなどし、しかも南監本も少いから、まことに扱いにくいのであるが、唯一のおそらくは元印本の行格・字様が十史の系列にあり、わずかな刻工名も元大徳のものとみられるからである。そして、路名不詳ながら、崇文書院刊と推定できそうである。

その元印本は台北の中央図書館の北平本であるが、北平図書館善本書目に、

存五八卷（序目・一〇一六・
三三〇七四）

元刻本

存二四卷（九〇一六・二一〇二四・五〇〇
五四・五七〇六〇・六一〇六三）

元刻本

とあったうちの前者だけである。なお、後者は現存しないので、巻六〇と六一の間が区切られた理由はわからない。

この本は、逆にいえば巻一七〇三二の一六巻を欠き、八冊であるが、粘葉装で、暗褐色の表紙（三六・七×二二・六センチ）に、「五代史序之八巻」のように墨書した題簽を貼っている。五代史記序があり、続いて五代史記目録があるが、その末尾に注者の「徐無党曰……」はない。

本文巻首は「五代史記巻第一（隔五）歐陽（隔三）修 撰（低一）

徐 無党 注」と題する。左右双边（二一・一×一五・四センチ）、

一部四周双边。一〇行、二二字・注文小字双行。版心は線黒口で、上象鼻のほぼ右半に字数を刻し、双魚尾で、「五代史卷之一（丁付）」のように題し、下象鼻に稀に刻工名を入れる。巻七一末葉に「宣徳郎国士博士臣高字校正」の一行がある。

刻工名は数が少ないのであるが、

7 享保 8 景先 匄士中 11 盛之 陳父 12 彭仁山 15 鄭埜
七父 万 仁 王 仲 卡 成 亨 茅

このうち、匄（陶）士中がこの九路本の信州路刊隋書に、彭仁山が九路本と常に誤られてきた一〇行二〇字本の元刊晋書に、毗陵の地名を冠してあらわれている。そのほか南宋刊本の元修部分にいくつかみえ、景先が贛州刊文選（書陵部・北平）に、鄭埜が両淮江東輦運司刊三史やいわゆる眉山七史などにしばしば、また盛之が両淮江東輦運司刊三史に、というようにである。対比例としてはいささか少きに失するが、行格等の版式面とあわせみれば、九路本の五代史記とみて誤りないはずである。ところで、この本にも 宗文（巻五八第九・一〇葉、巻七〇第一・七葉）・宗（二二箇所）の文字が刻工名のように、刻されている。

そして、明嘉靖八〇一年に南監二十一史が整備されると、五代史記にはこの大徳本が用いられた。後述するように、おそらく明の前中期に補修され、嘉靖の直前のころ印行された本には、末巻の尾題の次行に、「崇文書院刊」の五字が刻されている。また、「宗 子明」「宗文 肖」のように、「宗」「宗文」が山かんむりを欠くものの、崇文書院を指し、その下に刻工名が

続けられているとしか思えない例が頻出するのである。

そうすると、「宗」「宗文」は崇文書院の略号に他ならないわけ、北平本にも二六例ながらそれがあるのであるから、元代の刊刻も、明代の南京国子監による補刻も、それぞれに命を受けて崇文書院が担当したと推定せざるをえない。五代史記は七四巻といっても、この本で約七七〇葉、北史や隋書のように各儒学・書院が分担したことに照らしても、一書院で賄えない分量のものではない。

しかし、これも次に書院名を刻した修本の項で詳述するが、崇文書院は名称からいっても随所に存在したようであるが、九路に関する安徽・江西等の清志などでは、この元代に存在したものとして該当する書院が、いまだにつきとめられない。したがって、十史のうち晋書とこの五代史が、担当の路を確認できないのである。

刻工の彭仁山に、晋書二〇行本では毗陵の地名が冠せられ、この地が江蘇省常州武進で太湖の北であることは前述した。江東建康道肅政廉訪司の管内で毗陵寄りの路は、建康・太平・寧国路であるが、といってそれ以上のことはない。ただ、饒州路が史記と隋書の二史を担当したのに、九路のうち鉛山州を別格

とすれば、徽州路だけがその名を見せないから、晋書か五代史記かが徽州で刊刻された可能性はある。

巻四第三・四葉は下半が破損して補修されており、嚴密には補刻本ということになる。また、鄭堃は両淮江東轉運司刊三史でも、元代の第二次補刻刻工であったが、ここでもやや刀法が拙劣で、果して原刻かとの疑問が他の数葉も含めてないでもないが、三史でも両次の補修は近接していたから、とくにそうとみなすわけにもゆかない。

巻六七第一・三葉を欠く。

毎冊首尾に「京師圖書／館收藏印」。ほかに「金華府解物人吳仲和」^(智?)「金華府解物人余鎬」^(鮮?)の朱印が、料紙の隅などに捺されている。これらは先に明初の印本であることを示すと、晋書の元刊二〇字のところでは考証しておいた^(宋元刊三國志および晋書について)。

旧京書影(263)に巻五七首半葉、(264)に巻七四尾半葉が影印され、前者は九路本の典型的な字様を示すが、後者はやや拙い。ただ、尾題の次に「崇文書院刊」とないことを写真が明示している。

次に「崇文書院刊」本である。この刊記が実際に刻されてい

るものである。

内閣文庫に一部あり「元刊（崇文書院）」と著録されているが、明の前期ないし中期に、少くとも二度の補修を受けている。すなわち

七四卷 「元大徳」刊〔明前期・中期〕通修（崇文書院） 八冊
となる。他に各善本書目に、

元宗文書院刻明修本 二〇冊 北京図書館

元宗文書院刻本 有鈔配 上海図書館

とあるのが同版本と思われる。ただし、内閣文庫本には明らかに「崇」とある。

内閣文庫本は、栗皮の元表紙（二八・四×一八・一センチ）を、帝國図書館蔵と空押しした薄茶色の表紙で覆っている。元表紙には、左肩に「五代史序目紀之十二」のように墨書し、右肩に「昌平坂／学問所」の墨印が捺されている。

五代史記序、同目錄、首内題など北平本と同じで、やはり目錄末に徐無党の注語はない。

原刻葉もかなり残存し、その刻工名もみられる。しかし、おそらく明の永樂以後、すなわち一五世紀なかばころかとみられる補刻葉が相当に混る。その刻工として一宗（一宗刊）王徳明

淡亨 趙仁寿などがおり、また前述のように「宗」または「宗文」とし、一ないし二格分を空けて一宗人禾子明万山方午王肖周李子若虚徐などと続ける例が珍しくない。そして、全巻の最末葉が補刻葉であり、その尾題の次行に「崇文書院刊」とあるのである。つまり、刻工名に冠する宗宗文は崇文書院の略号らしいのである。北京・上海図書館の善本書目が「宗文書院」とするのは、あるいは最末葉を欠いて刊記がないものの、諸解題を承け、この宗文をそれと解したためであろうか。次の南監二十一史の嘉靖修本では、これらの名はほとんど削られてしまっているから、宗文書院刻と称し、かつ嘉靖修といわないのはこれと同版である可能性が濃い。

明代の第二次の補刻は、嘉靖をそれほど遡らない弘治・正徳ころかと推定する。字様はやや太めの稚いもので、量も少い。この本の巻二第一・二葉、巻三第一・二葉などが欠葉であるが、嘉靖修本ではここに第二次修と同じ字様の補刻が入っている。しかし、この本の別の箇所と同じ補刻があるのであるから、この本の印行がその補刻と前後していたことであろう。

第一冊尾（巻一二尾）に「文化戊辰六月端六日卒業於藥材所／樗園良」と朱筆の識語があり、一部に朱句点、傍線が施され

である。

蔵印は「大学校／図書／之印」「浅草文庫」「昌平坂／学問所」
(墨)「大日本／帝国／図書印」。

さてこの崇文書院であるが、地方志を明清の各府県志までを詳細に調べることは怠ったものの、同治・光緒刊の各通志には該当するものがみあたらない。道光一〇年序刊の安徽通志にこの名はまったくみえないし、元の江東建康肅政廉訪司管下の周辺にあたる地域でも、崇文書院はすべて明の嘉靖以後の設立されたものばかりである。

たとえば、光緒元年刊の浙江通志卷二五の杭州府の崇文書院は、西湖跨虹橋の西にあって明の万曆間に巡撫御史葉永盛が始めたものであり、嘉興府のは明嘉靖中の知県の陳一謙が立てたとある。光緒六年刊の江西通志卷八一によると、吉安府の治北三〇里の伊溪の崇文書院は同治一〇年に北郷公が建て、撫州府のものは嘉慶二年の仙桂公の建立であるという。

結局、明代前期の崇文書院の所在はわからず、元大徳の原刊の際も九路のいずれかの路の崇文書院が担当したと思われるが、これも明らかにすることができない。

嘉靖八・一〇年に南京国子監で二十一史を整備して印行をはじめたが、五代史記にはこの元大徳九路本が採用された。以後、万曆二・五年に改雕されるまで半世紀弱の間、かなりの部数が刷られたであろうが、現存するものは左の通りである。

七四卷 一〇冊 内閣文庫 一〇冊 尊経閣文庫

一〇冊 東京大総合図書館

二〇冊・一〇冊

台北中央図書館

存五八卷(欠卷四二・五〇・五九・六四・七四)六冊

七四卷 二四冊 南京図書館 (有抄配) 八冊 北京大

台湾所在本は中国訪書志(増訂本四六二頁)により、大陸所在本はいささか古いがそれぞれの目録によった。

これらは南監嘉靖二十一史本の一であるから、その際の補刻葉の版心に同八・九・一〇年の補刊年記が入っている。そしておそらくそれにもなつて、崇文書院の名が消えている。内閣文庫本は嘉靖修本でもやや後印のもので、前述の「崇文書院刊」本より漫漶が進み、嘉靖一〇年以後の補刊年記はないが、南監の補修に加えて、いささかの変化を生じている。

まず、陳師錫の序文を欠くが、これは尊経閣本は備えているから、たまたま落ちたとみられるものの、中国訪書志によれば、

中央図書館本の三部もみな後印本で、序がないというから、嘉靖後半のある時期にこの版本が損失したかにも思われる。

ついで、目録末に徐無党の注語がこの版ではじめて付刻されたことである。目録第一八葉の末が、従来、空三行で尾題が第九行にあったものを末行（次行）に送って、四行分に小字双行で計八行にわたって、これを埋木して加えたものである。

そして、逆に卷七四（末卷）の尾題の次行の「崇文書院刊」の五字が削りとられた。この末葉（第一四葉）は、原刻葉では裏二行で本文が終り、空二行の後、「五代史記卷第七十四」と尾題があったのであるが（旧京書影²⁶⁴）、明前中期の補刻で空二行・尾題・刊記と改められ、ここに嘉靖九年修葉に代えられて、刊記が再びなくなったものである。南監で行われたのであるから当然であろうと思われ、尊経閣本・東大本はこの葉を、中央本の第三はこの巻を欠いて確認できないが、中央本の二部

にもないと中国訪書志はいう。

嘉靖の補修によって、原刻葉は僅少となり、明の前中期の補刻刻工名も大小字数も大半が消えてしまっている。版心下象尾の宗宗文もまずみつかからない。

内閣文庫本に「林氏／蔵書」「浅草文庫」「昌平坂／学問所」等、尊経閣本に「清山／蔵書」等、東大本に「嘉興／呉万／里氏印」の蔵印がある。中央図書館本の印記は、同館の金元本図録と中国訪書志に委ねて省く。

正史宋元版の研究にはハーヴァード大学燕京研究所の一九七四―五年度の研究補助金を受けている。また、これら宋元刊本の閲覧調査は所蔵各位の格別のご厚意によった。それだけに発表の遅れを恥じつつ、篤く感謝申しあげる。